

2010 年度 小委員会活動成果報告

(2010 年 2 月 9 日作成)

小委員会名	集合住宅の遮音性能評価水準検討小委員会	主 査 名：濱田 幸雄 就任年月：2007 年 4 月
所属本委員会 (所属運営委員会)	環境工学本委員会 (音環境運営委員会)	委員長名：久野 覚 主 査 名：田端 淳
設 置 期 間	2009 年 4 月 ～ 2013 年 3 月	
設 置 目 的 各年度活動計画 (箇条書き)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 負荷騒音・暗騒音の大きさをパラメータとした遮音性能評価水準，評価手法の構築 ・ 集合住宅に暮らすための社会的共通認識を確立するための情報発信。 	
委員構成 (委員名 (所属))	委員公募の有無：2010 年度に公募を実施 濱田幸雄(日本大学)、羽染武則(東急建設)、田端淳(大成建設)、岩本毅(三井住友建設)、木村和則(小林理研)、古賀貴士(鹿島建設)、大脇雅直(熊谷組)、山下恭弘(信州大学)、坪井政義(大林組)、藤本一壽(九州大学)、大内孝子(東京都市大学)、坂口紳一(東海興業)	
設置 WG (WG 名：目的)		
2010 年度予算	50,000 円	ホームページ公開の有無： 委員会 HP アドレス：

項 目	自己評価
委員会開催数	6 回 (年度内計画を含む)
刊行物 (シンポジウム資料等は 除く)	
講習会	
催し物 (シンポジウム・セミナー・研究会・見学会等)	
大会研究集会	
対外的意見表明・パブリックコメント等	
目標の達成度 (当初の活動計画と得られた成果との関係)	1. 集合住宅室内の発生音の現状を把握するために、日本建築学会関係小委員会及び関連学会の研究部会のメンバーにアンケートを送付・回収し、分析を行い、その結果を建築学会大会で発表した。 2. 標準重量衝撃源衝撃力特性(2)の加振力は、実生活における衝撃力の発生頻度分布上、どの位置にあるのかを明らかにするための分析に着手した。
委員会活動の問題点・課題	1. 生活音はプライバシーに関わるため、現場実測が極めて困難である。

*小委員会活動成果報告書は本書式を基本とする。ただし、それぞれの本委員会において活動実績を報告する共通項目があれば、最下段に項目を追加して記述してもよい。

- * 小委員会活動成果報告書は本書式を基本とする。ただし、それぞれの本委員会において活動実績を報告する共通項目があれば、最下段に項目を追加して記述してもよい。
- * 中間年度には中間評価を、最終年度には最終評価としての自己評価を記入すること。

環境工学本委員会用 自己評価欄

2010 年度 集合住宅の遮音性能評価水準検討小委員会活動 自己評価

(中間年度評価)

総合評価 (4段階評価)	A	(B)	C	D
総合評価に関する 自由記述欄 (理由、特記事項等)	<p>本小委員会は、集合住宅の床衝撃音、室間遮音、および交通騒音等の外部発生騒音と建物内発生騒音に対する居室における発生騒音(以下室内騒音)に関して、遮音性能評価水準を検討、提案し、実務で生じる苦情等の是非に対する判断基準の目安として活用できるようにすることを目的として活動している。</p> <p>2010年度は、負荷騒音の大きさ、暗騒音レベルの影響を考慮した遮音性能評価水準について検討を行った。具体的には、集合住宅室内の発生音の現状を把握するために、日本建築学会関係小委員会及び関連学会の研究部会のメンバーにアンケート調査を実施した。回収したアンケートを分析した結果、限られた範囲内ではあるが、集合住宅の室内騒音レベルの現状をある程度把握することができたので、「集合住宅の室内環境音レベルの現状について—遮音性能評価水準の構築に向けて—」と題して大会で発表した。</p> <p>また、負荷騒音の大きさに関して、標準重量衝撃源の衝撃力特性(2)の加振力は、実生活における衝撃力の発生頻度分布上、どの位置にあるのかを実験的に明らかにする検討にも着手した。この検討では、床衝撃音実験室において、年齢、性別の異なる子供数人が自由に行動した場合、所定の動作を行った場合の直下室発生音、及び同じ動作を複数の成人男子が行った場合の発生音の分布状態と、衝撃力特性(2)のボールを自由落下させたときの発生音を比較するものである。</p> <p>この検討結果は、ボール衝撃力と実生活における衝撃力の対応関係を明らかにするばかりでなく、本小委員会の活動目的の一つでもある標準的な住まい方に関する指針にも適応できるものであり、次年度も継続的に分析、検討を行う予定である。</p>			

- 総合評価は4段階(A>B>C>D)にて、自己評価すること。
- 中間年度における自己評価は、単年度の活動計画・目標に対する達成度にて、最終年度における自己評価は、小委員会の設置目標に対する達成度にて評価する。自己評価の目安は以下の達成度レベルを参照のこと。
 - A 評価：小委員会設置目標に対し、80%以上の達成度
 - B 評価：小委員会設置目標に対し、70%から 80%の達成度
 - C 評価：小委員会設置目標に対し、60%から 70%の達成度
 - D 評価：小委員会設置目標に対し、60%以下の達成度
- 小委員会の活動に対し、第三者的評価・外部評価(シンポジウム、セミナー等の催し物を開催した場合に収集した参加者の評価など)に相当する情報がある場合には、その内容も記述すること。